シャトールーの王女

Tomo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シャトールーの王女

【Ｎコード】
Ｎ３６８０ＢＡ

【作者名】
Ｔｏｍｏ

【あらすじ】
一ノ瀬真は、携帯ＭＭＯＲＰＧ「Ｗｏｒｌｄ　ｏｆ　Ｌｅｇｅｎｄｓ」をプレイすることと、クラスのアイドル・雨宮紫を遠くから愛でること以外には人生の楽しみを持たない平凡な高校生だ。ところが、ある日突然、罰ゲームで雨宮紫に告白しなければならなくなってしまった。さらに、銀髪美少女の転校生まで現れて大騒ぎに。そんな時、真のプレイする「Ｗｏｒｌｄ　ｏｆ　Ｌｅｇｅｎｄｓ」の世界では大きな変化が起きていた。

01

「カルパントラ軍はその勢約２万５千。一両日中には先陣が王都に到達する見込みです。対する我が王都防衛の軍は約５千。ビエル方面からの援軍は約３万、到着には最低でも４日かかります」

シャトールー王国、エキュイエ王城内の一室に、近衛軍の幹部が慌ただしく集まって軍議が開かれていた。南方の国境を接するカルパントラ王国がシャトールー王国に電撃侵攻を開始したのが約１週間前。シャトールー軍は、予想外の事態に軍の展開が遅れた上に、王都防衛上の重要拠点での痛恨の戦術ミスが重なり、わずか１週間で王都への接近を許してしまった。

「加えて、カルパントラに内通して反旗を翻したファシュ、ランジェサンの計３千の軍が北方に王都を挟撃する形で展開しており、カルパントラ軍の到着に合わせて王都への攻撃を開始すると思われます」

更に状況を悪化させているのが、味方の裏切りだった。ファシュ、ランジェサンは、この２０年ほどの間にシャトールーで飛ぶ鳥落とす勢いで急成長を遂げた新興貴族だ。その２氏がカルパントラの侵攻に合わせて反旗を翻しており、王都は２正面作戦を余儀なくされていた。

「最低限４日間、王都を守りきれる可能性は？」

近衛軍は王直属の軍で、目的は王と王族を守ることであり、国と国民を守る責務は課せられていない。全軍が王城内に駐留していて、その勢約５００人。今行われている軍議は、いかに王都を守るかで

はなく、いかに王と王族を守るかであった。

「戦いが始まる前に王を王都から脱出させることはできるか？」

「背後はファシュ、ランジェサンの軍で抑えられていて、もう、手遅れかと」

「くっ」

シャトールーには近衛軍の他、衛士軍（えいしぐん）と呼ばれる王家直属の常駐兵力が国境や主要都市の警備と防衛に当たっているが、戦力としてはそれほど多くはない。防衛にしろ反乱鎮圧にしろ侵略にしろ、主体となるのは貴族の私兵であった。そして、今回の王都防衛の主力も、やはり彼ら貴族軍である。

「貴族軍が頼みの綱か」

と、突然、部屋の扉が勢い良く開かれ、鎧を身にまとった少女が飛び込んできた。

「私を差し置いて軍議とは何事だ！」

「リゼット様。どうしてここに！？」

「シン。私も戦うぞ」

シンと呼ばれたのは、軍議に集まる幹部のなかでもひときわ若い少年だった。歳は１６、７歳ほどではあったが、その年にして近衛少将の地位についていて、貴族の待遇を受ける身であった。シャトールーでは貴族は世襲ではなく、貴族の子であっても必ずしも貴族になれるとは限らないため、自らその資質を示す必要があった。シンがこの歳で貴族の身分にいることは、その資質がひときわ高いことを物語っていた。

対して、軍議に飛び込んできたリゼットと呼ばれた少女は、シンと同じく１６、７歳ほどの美しい少女だった。腰まである銀色の髪はゆるやかにウェーブを描いていて、耳の先が尖っていた。身長は約１５０センチメートルと小柄で、胸の方は少々残念であったが、快活さが全身からにじみ出ていて、思わず人目を惹きつける魅力を持ち、誰もが認める美少女であった。シャトールー王国を建国したエルフの末裔であり、現国王の一人娘、唯一の王位継承者であった。

「いけません。私たちはリゼット様をお守りするためにいるのです。そのリゼット様が戦場に出られては、私たちの意味がありません」

「シン。私はまだ若輩だが、今がどのような状況かは理解している。王都は四方を囲まれ、逃げることは叶わない。圧倒的な寡勢で王都を数日間防衛して、援軍の到着を待つことだけが唯一の望みだと。それなら、私も戦場に立って、皆と一緒に敵を食い止めるのが最善だ」

「いけません」

「どうしてだ！？　王女とはいえ、私も騎士としての訓練を受けている。戦力としては近衛少将と並ぶほどには…」

「どうかご辛抱ください、リゼット様」

「っ…」

「リゼット様は建国の母エメ様の直系の子孫でいらっしゃいます。たとえ王都が落ちたとしても、リゼット様が生きていれば、シャトールーが滅びることはありません」

「…」

リゼットは何も言い返さず、シンを睨みつけると、そのまま大股で部屋を出ていった。

「リゼット様！」

シンは近衛大将に一礼して、リゼットを追いかけて部屋を出ていった。会議の途中であったが、誰もそれを咎めるものはいなかった。シンがリゼットのお気に入りであることは、近衛軍の中では誰もが知ることであり、気性の荒いリゼットをなだめることができるのは、シンを置いて他にはいなかったからだ。今回の作戦でもシンの役割はリゼットの護衛であり、ここでリゼットの機嫌を取ることが作戦会議に優先すると受け取られていた。

01（後書き）

用語解説

シャトールー王国
　この話の舞台となった王国。首都はエキュイエ。北方に第2の都市ビエルを持つ。

カルパントラ王国
　シャトールー王国の隣国。

シン
　シャトールー王国近衛軍の少将。

リゼット
　シャトールー王国の王女で唯一の王位継承者。

02

◇

「…ろー、兄貴ー」

遠くから呼び掛ける声に、一ノ瀬真の意識は現実世界に引き戻された。

「…、もうちょっと…」

しかし、一度覚醒した意識は、すぐに再び夢の世界に戻って行った。

…

「兄貴！　いつまで寝てんだ。遅刻するぞ」

さっきよりはるかに近くから叫ばれた声に、真は慌てて目を覚ました。

「やべ。二度寝した。凛、今何時？」

「７時４０分」

「マジで？　ギリギリじゃん」

真が急いで着替えようとベッドから飛び起きたところで、股間に硬いものが当たって激痛が走り、悶絶して倒れ込んだ。

「いくら妹が可愛いからって、朝から興奮し過ぎだ」

「…、これはただの生理現象だ…」

一ノ瀬真はただの平凡な高校1年生の男子だ。家の近くの高校まで徒歩で25分、歩いて通っている。なぜか自転車通学は徒歩30分以上の場合と決まっているので、歩いて通わなければならないのだ。ちなみに真の読み方は「まこと」ではなく「しん」だ。よく間違えられるので注意するように。

そして、真の部屋に侵入して股間に蹴りを入れたのが、真の妹の凛(りん)だ。「しん」の妹が「りん」とか手抜きとしか思えない。中学3年生で真の1つ下だ。兄の真が言うのもナンだが、凛は美少女だ。特に中学生とは思えないその成長したボディラインが大きな魅力だ。はっきり言ってその胸とか兄として妹でなければ一度触ってみたい。

「兄貴、どこを見ている?」

「…、いや。どこも見ていない。断じてだ!」

「ふんっ。…、朝ごはんできてるから、さっさと食べてよ」

そして、この屋根の下には真と凛の他は誰も住んでいない。都内のそれなりに立派な1軒屋に兄、妹の2人暮らしだ。母は7年ほど前に事故で他界している。父は有名企業の専務だが、故あって別れて暮らしている。その辺の事情は機会があれば説明できるかもしれない。

「痛い…。眠い…。昨日、アレ、やりすぎたかな」

真は蹴られた股間を押えながらつぶやいた。凛はもう部屋から出た後だったので誤解されることはなかったが、アレとは決して性的なアレではない。股間を押さえていることとは無関係だ。アレとは「Ｗｏｒｌｄ　ｏｆ　Ｌｅｄｇｅｎｄｓ」、略して「ＷｏＬ」と呼

ばれる携帯ゲームのことだ。

真は平凡な高校生で、人生の楽しみは２つしかない。その内の１つがＷｏＬという、携帯ＭＭＯＲＰＧと呼ばれるジャンルのゲームだった。昔は携帯でＭＭＯＲＰＧを作ってもハードやネットワークの制限のためになかなか人気化しなかったが、携帯の高性能化によりここ数年で急速に市民権を得てきた。ＷｏＬはそんな新世代の携帯ＭＭＯＲＰＧの草分け的存在で、今ではＰＣやゲーム専用機の有名ＭＭＯＲＰＧを超えるユーザー数を誇っている。

真がＷｏＬを始めたのは、ＷｏＬが夜に出た直後の３年前、中学１年生の時だった。以降、真は少なくない時間を投入してゲームを攻略してきて、今では多少名の知れた古参プレイヤーになっている。昨日も真は寝る前にベッドの中で４時間ほどゲームに没頭していた。そのせいで若干寝不足だ。

「いけね。急がないと遅刻する」

02（後書き）

用語解説

一ノ瀬真
主人公。平凡な高校1年生の男子。

一ノ瀬凛
真の妹。中学3年生。

WoL
携帯MMORPG「World of Legends」の略。

03

◇

「うしゃー。お・れ・の・か・ち！」
「マジかよー」

真の前で大げさにガッツポーズをしているのは、真の悪友の橘総司（たちばなそうじ）だ。真とは小学校からの付き合いで、なぜか毎年同じクラスになっている。そして、何に勝ち誇っているかというと、

「真くん、保健体育といえども義務教育だよ」
「高校は義務教育じゃねぇよ」
「ふふん。そんなトリビアを披露しても、君が期末試験の総合得点で負けたことに変わりはないんだよ」

真と総司は高校１年１学期の期末試験の総合得点を競っていたのだ。そして、たった今、最後の保健体育の試験結果で総司が逆転して真に競り勝ったのだった。

「くっそー。保健体育が１００点とか、学業の優先順位間違ってんだろ。ていうか、ただのエロだろ」
「ああエロだ。それがどうした」

総司の野郎は教室のど真ん中で、清々しい顔でエロ宣言をしやがった。周りの女子、ドン引きしてる。俺まで同類に見られるだろうがっ！と真は心のなかで叫んでいた。

「まあ、それで罰ゲームだ。何がいいと思う？」

「考えとけよ！」
「もちろん考えてたよ。でも、何も選択肢を与えられないのは可哀想かなと思ってね」
「選択肢？」
「そう。選択肢は１つ！」
「一択じゃねーか」

罰ゲーム。総司のやつがこんなに浮かれてやがるのはそのせいだ。真と総司は期末試験前に総合得点で負けた方は勝ったほうの命令を何でも１つ聞くという賭けをすることにしたのだ。真が勝ったら総司に夏休みの宿題を全部押し付けるつもりだったのだが、総司は何を考えているのか。この浮かれぶりだとろくな事じゃないに違いない。

総司はきょろきょろと周りを確認すると、耳元に口を近づけて何かをささやいてきた。
「雨宮紫（あまみや ゆかり）に告白しろ」
「！！　×〇、なっ、何を！」

真は、思わず大声を出してしまって、慌てて口を閉じた。周囲の視線が痛い。

「やー。お前、好きなんだろ？　ばればれだよ？　なんせ１日中、ちろちろ雨宮さんの方を見てるんだからな」
「な、な、何をおっしゃい…」
「まー、だからこの際すっきりしちゃえばいいんじゃないかと、真の親友としては思うわけなんですよ」

話だけ聞くと、総司はめちゃくちゃいいやつに思えるかもしれな

いが、そんなわけはない。雨宮紫はクラスのヒロインで、その美貌は1年生だけでなく、上級生にまで噂が広まっているというくらいだ。すでに何人か告白して、すべて断られているという噂も聞く。つまり、真が告白しても万が一にも勝ち目はなく、無様に振られるのを楽しもうという魂胆なのだ。

「この鬼っ！　悪魔っ！」

「何を言ってるんだ。俺は親友のことを思って協力してあげようと言ってるんだよ。雨宮さんは俺が責任を持って呼び出しておくから、お前は待ち合わせの場所に行って告白するだけでいいよ」

つまり、勝手にこそこそ隠れて告白しないで、俺が影で覗いてるから、その目の前で告白して振られろ、ということだ。総司の満面のニヤニヤを見て、真はとりあえずぶん殴っておきたい気分になったが、さすがにそんな派手なことは目立つので、見えないところですねを蹴っておいた。

「痛って」

「ふん。自業自得だ」

「まあいいや。とにかくこれで罰ゲーム成立だ。今日の放課後までには準備しとくから、お前は心の準備をしとけよー」

総司が去った後、真は頭を抱えていた。精神的に。総司のことだからどうせいやらしい罰ゲームを考えているに違いないとは思っていたが、真と総司なら真の方がいつも成績が上なので、総合得点で負けるとは思っていなかった。まさか副教科ばかり勉強してアホみたいな高得点を取ってくるとは思いもよらなかった。

「うー。マジかよ」

03（後書き）

用語解説

橘総司

真の悪友。

雨宮紫

読みは「ゆかり」。クラスのアイドル。真の片思いの相手。

04

◇

真は平凡な高校生だ。そして、人生の楽しみは2つしかない。1つはＷｏＬ。もう1つは雨宮紫だった。出会いは衝撃的だった。主に真にとって。入学式当日、いつものように総司とだべりながら教室に入ると、そこに天使がいたのだ！

え？　いまいち衝撃が伝わらない？　だから天使がいたんだって！　その天使の名は雨宮紫。身長１６２センチメートルでモデル体型。髪はロングのストレート。胸はボディーラインを崩さないギリギリのラインで存在を強く主張し、くびれた腰、持ち上がったお尻、細くて長い脚、ぱっちりとした目に魅力的な唇、そして笑顔、その全てが真の心を鷲掴みにした。

真は紫を一目見て、この数奇なめぐり合わせを神に感謝した。そして、それから真の日課に雨宮紫を観察することが付け加わった、というか、日課の大部分が観察することに置き換わったのだ。

え？　ストーカー？　違います。天使を愛でることは神に祈りを捧げることと同じ。紫は真の天使だから、紫を観察することは真の信仰心の発露なのだ。

と、授業中、若干危ない思考に陥っていた真の下へ、総司から伝言を書いたメモが回ってきた。

「今日の放課後、講堂のロビーに来い　総司」

それは罰ゲームの場所の指定だった。もう紫からアポを取ったとは、総司の行動力は只者ではない。というか、どういう名目で呼び出したんだろうか？　真は総司のメモを見て、放課後のことを考えて胃が痛くなってしまった。

放課後の告白の場所として、講堂のロビーというチョイスは絶妙と言えた。定番の校舎裏は体育館があって、放課後は運動部の部員が往復していて落ち着かない。ならば屋上はと言うと、そこは演劇部のテリトリーだった。奴らは毎日屋上で発声練習をしているのだ。

その点、講堂は特別なイベントがなければ放課後は施錠されていて人気は全くない。講堂のロビーとは講堂への階段を登った所の少し広い踊り場のことだ。近くにはめったに人が使わないトイレもあって、総司が隠れて盗み聞きするにはうってつけの場所でもある。

「あー。何て言えばいいんだろ」

◇

放課後、緊張でおしっこが近くなってしまった真は、講堂へ行く前にトイレに向かった。用を足した後、真は石鹸を使って丁寧に手を洗った。アレを触っておしっこの付いた手のままで告白するなんて考えられない。天使は天使。そんな不浄のものが近づいて、万が一汚れてしまったら大変なことになる。

手を丁寧に洗っていたおかげで、少し遅くなってしまった。急いで真が階段を登ると、紫はすでにロビーで待っていた。

「ごめん。もしかして、待たせた？」

「ううん。大丈夫。今来たところだから」

そう言って、紫は真に笑顔を見せた。超至近距離（約２歩）で見る天使の笑顔！　それだけで真は胸が満たされて、もう死んでもいいと思えた。ありがとう総司。さっきまで恨んでいたが、今は総司が神様に思えるよ。

「一ノ瀬くん？　どうしたの？」
「えっ？」
「なんか、今、ぼーっとしてたから」
「あ、いや、あの…」

天使が名前を覚えていてくれたという事実に舞い上がりそうになった真だが、今日の目的を思い出して気を引き締める。これから真は絶体絶命の神風特攻を敢行しなければならないのだ。胃がキリキリと音を立て、心臓はバクバクと暴れだし、頭は熱を持って思考を妨げる。１００通り以上も考えた告白の言葉は、今や一言も思い出せない。

「…」

真は次の言葉を探そうとして、そのまま固まってしまった。なんて言えばいいんだ。対する紫は、なぜか頬を赤らめて真の胸あたりを見つめて、真の言葉を待っている。ものすごく可愛いが、今は観察している時間ではない。

「あ、あのっ」

05

真が選んだ言葉は、真そのもののように平凡な言葉だった。

「す、好きです。付き合ってくらしゃい」

平凡な男はどこまで行っても平凡なのだ。天使がどこまで行っても天使であるように。そこには絶望的な境界線が引かれていて、絶対にそれを超えることはできないのだ。だから見ろ、こんな一世一代の大勝負で、こともあろうに舌をかんでしまったじゃないか！

終わった。

告白した瞬間に負けを確信した真は、返事を聞く前にうなだれていた。いつもこうだ。肝心なところで必ず失敗する。目玉焼きを作ると必ず黄身が壊れるし、料理をすれば何か調味料を間違える。一度、お茶漬けを作るつもりで、間違えてりんごジュースをご飯にかけたこともあった。今回の賭けだって、敗因は総司が保健体育で１００点を取ったことではなく、真がマークを一つずらしたせいで４８点しか取れなかったことだったのだ。

「…、はい」

考えてみれば、真の人生はこんなイベントであふれていた。小学校の時には、修学旅行の班を発売したばかりのゲームと交換で憧れの娘と同じ班に代わってもらったのに、旅行当日高熱を出して小学校最後の思い出は病院の点滴だったということもあった。高校受験も本当は推薦がもらえたはずなのに、申込書が提出日当日に風に飛ばされて川に落ちてしまったせいで、受験するはめになったのだ。

「あの、一ノ瀬くん？」

それも、単に運が悪いなら諦めもつくが、全部自業自得だから悔やみ切れない。修学旅行で熱を出したのは、浮かれすぎて３日間徹夜して修学旅行のプランを考えていたせいだし、推薦の申込書を落としたのは、わざわざ風の強い日に橋の上で提出書類の確認をしていたからだ。今回だって、１００通りも告白の仕方を考えていたのに、よりによって一番平凡なのを選んで、しかも舌を噛むなんて…

「一ノ瀬くん！」

「はい？」

「今日は、私、部活に行くけど、…、あの、明日、駅前のコンビニで８時に待ち合わせね」

「えっ？」

「じゃあ、明日ね！」

真は紫の言葉の意味が理解できずに、しばらく茫然としたまま立ち尽くしていた。待ち合わせって何のことだろう？　振られたんじゃなかったっけ？　真は、告白した後の記憶をたぐり寄せようとしたが、ショックで自分の殻に引き篭っていたせいで、紫が何て言っていたのか全く覚えていなかった。

「し～～～ん～～～～」

「ッ！　な、なんだよ」

びっくりした。総司がトイレの影に隠れて盗み聞きしているのを完全に忘れていた。総司は全く生気が消えていて、まるで幽霊みたいだ。

「この、…、裏切り者ー！！！」

総司は大声でそう叫ぶと、勢い良く真に詰め寄って壁に押し付けたが、真には全くそんなことをされなければならない覚えがない。

「お前、一体、どんなマジックを使ったんだ！　本当ならここで告白して、いつもみたいに何か致命的な失敗をして、振られてショックを受けて、俺が登場してメシウマだったのに、何でお前が雨宮さんと付き合うことになってんだよ！」

「へ、俺が？　雨宮さんと？　付き合う？　ほんと？」

「おーまーえー。ふざけるなよ」

なんてことだ。神様ありがとう。真の記憶には残っていないが、告白した後に何かきっとミラクルなことが起こったに違いなかった。でなければ、こんな平凡な男がこんな幸せを拾うことなんてできるはずがなかった。真がそんなタマではないことは、真自身が一番よく知っているのだ。

「そうだ！　なあ、真。お前と雨宮さんが付き合ったことをお祝いして、俺と凛ちゃんが付き合うってどうだ？　そうすれば、グループ交際ってことになって、俺もお前も幸せじゃないか。な？　な？」

「グループ交際？　えへー。こ・う・さ・い！　ああ、なんて魅力的な響き」

「だよな？　魅力的だよな？」

「よし、分かった」

「おー。じゃあ、…」

「だが、断る！」

こんなやつに大切な妹をやれるわけがない。どさくさに紛れて何

を言ってるんだ、となにげにシスコンな真は、不浄のものを見る目つきでお約束通りズッコケている総司を見下ろした。

しかし、この時、真はまだ気づいていなかった。世の中そんなにうまく行くわけがないということに。

06

◇

「兄貴、キモイ」

真は1時間くらい前から再三にわたって凛からツッコミを受けていたが、天にも登る心地の真には全く通用しない。むしろ言われれば言われるほどニヤニヤと笑みがこぼれてくる。それを見て、凛は余計に寒気がして真を見る目つきがどんどん冷たくなるのだった。

真と凛は2人暮らしだ。だから、朝食、夕食は2人で作らなければならない。しかし、真は例によって料理を作らせると極めて危険なので、料理は常に凛が作ることになっていて、真は洗い物担当になっている。一度そのことを総司に言ったら、「凛ちゃんの手料理くぁっ！」と騒いだので、その時には暴力的に黙ってもらった。

「ちょっと兄貴、ニヤつくか食べるかのどっちかにしてくれない？　食欲なくすんですけど」

「わりぃわりぃ」

「どうせまたゲームで何かいいことでもあったんでしょ。ほんと、オタクだよね」

「ふふん。なんとでも言え。俺は今日、脱非リア充を達成したのだ」

「は？　なにそれ、日本語？」

そう言えば、ＷｏＬの方はめんどくさいことになってたな、と真は凛に言われて思い出した。ＷｏＬの世界では今大きな戦争イベントが発生中で、真はその一方の側で籠城戦に参加しているのだ。し

かし、どうも戦況は旗色が悪い。今日あたり最終決戦になる予定なのだが…

「王女様を背負って逃げるとか、ありなのかね」

「兄貴…、頼むからそういうことを口走るのは家の中だけにしてよね」

うっかり口に出した言葉を、凛にしっかり聞きとがめられてしまった。

「とにかく、後片付けはよろしく。あたしはお風呂入ってくるから」

「後で俺も入るんだから、湯を落とすなよ」

「入れなおせばいいだけでしょ！　変態っ！」

最近、真が凛の後に風呂に入ろうとすると、湯が全部落とされていて、寒い思いで湯を張り直さなければならないことが何度かあった。それに真が文句を言うと、必ず逆ギレされるのだ。全く意味が分からない。

◇

シンは焦っていた。戦況確認のためにリゼットの監視を部下に任せて離れた隙に、リゼットが逃げ出してしまったのだ。

「リゼット様。リゼット様」

シンは部下と手分けしてリゼットを探しているが、どこに隠れたのか全く見つからない。戦況は刻一刻と悪化していて、城内に敵兵が乗り込んで来るのも時間の問題だろう。それまでにリゼットを見

つけなければ、どんなことが起きてもおかしくなかった。

「くそっ。一体こんな時にリゼット様は何を考えてるんだ」

シンは全く行方のつかめないリゼットに苛立っていた。こんなことならリゼットのプライバシーを多少無視してでも、部屋の中に監視をつけるべきだった。シンは、リゼットに対する信頼が裏切られたという思いで内心腹立たしく感じていた。

シンが謁見の間を通った時、ふと違和感に気づいた。

「おい。窓が開いてるぞ」

シンは一緒に行動している部下にそう言って、2人で窓に近づいた。謁見の間には大きなバルコニーがあって、そこに出ると城下を一望することができる。そこは最も見晴らしがよく、逆に最も無防備な場所でもあった。

そして、リゼットはそこにいた。

06（後書き）

用語解説

ＷｏＬ

携帯ＭＭＯＲＰＧ「Ｗｏｒｌｄ　ｏｆ　Ｌｅｇｅｎｄｓ」の略。

謁見の間

シャトールー王国エキュイエ王城の２階にある大広間。式典などを行う際に使われる。大きなバルコニーからは城下が一望できる。

07

「リゼット様！」

叫ぶやいなや、シンと部下は全力で駆け出した。あんな所に立っていたら、狙ってくれと言っているようなものだ。さすがに城の敷地外からバルコニーを狙えるほどの飛び道具は存在しないので、平時であれば何も問題はない。しかし、今や外郭は破られ、城本体の門前でのせめぎあいになっていた。弓の名手や遠隔狙撃魔法の使い手がいれば、射程距離に入る可能性は十分にある。

「危ないっ」

部下が魔法を使って急加速した。同時にシンもリゼットを狙う弓の存在に気づいた。コンマ1秒の遅れでシンも加速をしたが、矢はすでに放たれていて、シンの指はリゼットにわずかに届かない。

リゼットはその時、一心不乱に呪文を唱えていた。リゼットが行なっているのは広域治癒魔法だった。非常に高度な魔法で、リゼットに並ぶ使い手はシャトールー国内にはおらず、国外を見ても国に1人いるかどうかというものだった。この魔法のおかげで、シャトールー軍の兵士は倒れることなく、数倍の敵を相手にこれまで持ちこたえていたのだ。

しかし、その状況をカルパントラ軍がそのまま放置するはずはなかった。戦局が膠着していることに疑問を感じた司令官が広域治癒魔法の存在に気づき、使い手として名高いリゼットをバルコニーに視認して、カルパントラ軍髄一の弓の名手に命じてリゼットを狙撃させたのだ。

「ッ！」

シンはリゼットに手が届くやいなや、リゼットを力任せに抱きしめ、シンの身体が盾になるように身体を入れ替えた。そして、恐る恐るリゼットの生死を確かめた。

「シンッ、シンッ！」

奇跡的にリゼットは無事だった。なおもバルコニーの表に進もうとするリゼットを力で押しとどめて、謁見の間に引きずり込む。リゼットは大粒の涙を流してそれに抵抗したが、シンはそれを許さなかった。

謁見の間の中程までリゼットを連れてくると、リゼットは観念したのか床にへたり込んで声を上げて泣き始めた。そこで、初めてシンはバルコニーの方を見て、リゼットが助かった理由を理解した。

バルコニーには、さっきまでリゼットを一緒に探していた部下が倒れ伏していた。首に矢が刺さったまま。

矢がリゼットに届く寸前、シンはまだリゼットの後方にいて、矢からリゼットを守れる位置にはいなかった。しかし、シンの部下はシンよりも一歩早く反応できていたため、すでにリゼットの前方にまで飛び出していた。そして、急角度に切り込んで矢とリゼットの間に身体を入れたのだ。

シンの手がリゼットに届いた時、リゼットの目には自分の目の前に突然飛び込んだ人の首に矢がめり込む瞬間が映っていた。しかし、その直後、シンがリゼットを抱きしめ、盾になったため、その人が

その後どうなったかを見ることはできなかった。

リゼットはその人のもとに駆け寄って治癒魔法をかけなければと思い、必死に抵抗したが、シンはそれを許さず、謁見の間に引きずり込んだのだ。リゼットが次にバルコニーを見たときには、すでにその人はピクリとも動かず、遠目から見ても手遅れであることが分かった。

一目で状況を理解したシンは、泣き伏しているリゼットを見て、身を屈めた。そして、リゼットの肩を掴んで身体を起こして、その目を見つめた。リゼットの目は、絶望的な状況下で希望を失い、死に急いでいるものの目のようだった。

「リゼット様。ご無事でよかったです」
「シン。あの人が、あの人が…」
「リゼット様。この城は近い内に陥落します。リゼット様には落城の前に城から脱出していただくようにとの国王様と王妃様からのご命令でございます」
「ッ…、私は戦う！」
「いけません。これは勅命です」
「しかし、皆を見捨てて逃げるなど…」
「国王様は見捨てろとも逃げろともおっしゃっていません。…極秘任務です」
「えっ？」

シンの思いがけない言葉に、リゼットの目にわずかに生気が戻ったように見えた。

07（後書き）

用語解説

広域治癒魔法

広範囲に渡る人のステータスを同時に回復する魔法。一般に攻撃魔法よりも治癒魔法のほうが魔力の消費が大きいので、広域治癒魔法を行使する場合、治癒対象者から魔力を少しずつ分けてもらうことで術者の魔力を補うことが多く、その分高度な技術が必要となる。

08

◇

「こんなところに本当に抜け道があるのか？」
「そのはずです」

シンとリゼットは王城の地下に伸びる階段を降りていた。階段には明かりは全くなく、魔法で生み出した明かりを頼りに進んでいた。階段は狭く長く、どこまでも地下に伸びていた。

「地の底まで続いてるみたい」

どこまで降りれば地の底にたどり着くのか、2人ともその答えを持ってはいなかったが、もしこの世に地の底まで続く階段があるのなら、この階段こそがその階段ではないかと思えるほど、階段はどこまでもどこまでも続いていた。

「大丈夫ですか？」
「えっ？」

気がつくとリゼットは小刻みに震えていた。顔もひどく青ざめている。

「怖いでしょう？」
「そんなことはないっ！」
「いえ、怖いはずです。どうやらこの通路には人払いの呪いがかけられているようですから」
「呪い…？」

「大丈夫です。この呪いは恐怖心で人を近づけないだけで実害はありません。ダンジョンなどにはよくある呪いです」
「シンは怖くないのか？」
「もちろん怖いです。この呪いは強制的に恐怖を感じさせる呪いなので、慣れることはあっても恐怖を感じなくなることはありません」

そう言って、シンは自分の手をリゼットに見せた。リゼットが目を凝らすと、シンの手が小刻みに震えているのが見えた。

「もうしばらくの辛抱です。頑張りましょう」
「…、シン」
「はい？」
「手をつないでやってもいいぞ」
「は？」
「シンが怖がっているから手をつないでやってもいいと言っているんだ」
「…、分かりました」
「それから、話をしながら歩くと恐怖が紛れるというぞ」
「分かりました。…、じゃあ、私が昔、冒険者を始めたころの話をしますね」

◇

それはまだシンがシンという名前ではなかった頃、駆け出しの冒険者だったシンはあるクエストを受けた。それは盗賊団にさらわれた貴族の子女を救い出すというものだった。

シンが盗賊団のアジトに行くと、そこには既に戦闘の後があり、傷ついて戦闘不能になった盗賊たちがあちこちに倒れていた。

「ちぇっ、先を越されたか」

このクエストは、盗賊たちのレベルが低いためクエストのレベルも低く設定されていたのだが、その割には成功報酬が高かったため、取り合いになる可能性が高かったのだ。シンはクエストが公開された直後に発見して、そのままっすぐ現場まで来たため、一番乗りだと思っていたのだが…。

「一体、どんなやつに先を越されたんだろう」

早耳には自負のあった自分を出し抜いた冒険者にも興味があったし、もしかすると先行した冒険者がボスに倒されているかもしれないので、無駄足かもしれないとは思ったがシンはアジトの奥に進むことにした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3680ba/

シャトールーの王女

2012年1月14日00時52分発行